

〔例題1〕 構造機能主義に関する次の文のA～Dに入るものの組合せとして妥当なのはどれか。

構造機能分析理論において、順機能／逆機能などの概念群を提案して、機能分析の精緻化に貢献した〔A〕は、パーソンズが一般理論を目指したのに対し、より具体的な経験的仮説を積み上げて概念枠組みを構成する〔B〕を提唱した。この成果として生まれた用語には、株価の暴落の予想が株の売りの増大を促し結果的に株式市場の暴落を引き起こす例などにあてはまる〔C〕や、人の感じる不満は境遇の客観的な劣悪さではなく、その人の抱く期待水準と達成水準との知覚された格差に起因することを表した〔D〕などがある。

A	B	C	D
1. R.ダーレンドルフ	闘争理論	マタイ効果	役割葛藤
2. R.ダーレンドルフ	中範囲の理論	自己成就的予言	認知的不協和
3. R.K. マートン	闘争理論	マタイ効果	相対的剝奪
4. R.K. マートン	中範囲の理論	自己成就的予言	相対的剝奪
5. L. フェスティンガー	認知的斉合性理論	適合性原理	認知的不協和

[正答4]

〔例題2〕 動因と誘因についての記述として妥当なのはどれか。

1. 一般に、動因とは、食物や飲み物など、生体の行動を引き起こす外部的要因のことであり、誘因とは、場の雰囲気や他者の言動など、行動を促進する周辺的な要因のことである。
2. 一般に、動因とは、食物や飲み物など、行動の直接的な原因のことであり、誘因とは、食後の睡眠欲求など、行動の達成によって喚起される別の行動欲求のことである。
3. 一般に、動因とは、空腹や渇きなど、生体に行動を起こさせる内部的要因のことであり、誘因とは、食物や飲み物など、生体の行動を維持・促進する外部的要因のことである。
4. 一般に、動因とは、空腹や渇きなど、生体に行動を起こさせる内部的要因のことであり、誘因とは、疲労など、生体の活動を抑制させる内部的要因のことである。
5. 一般に、動因とは、空腹や渇きなど、生体に行動を起こさせる生理的要因のことであり、誘因とは、動因により喚起される「食べたい」、「飲みたい」といった欲求のことである。

[正答3]